

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (VIII)

—— А.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (VIII)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

The First Eastern Campaign began for the liberation of Guangdong. After the 1st and 2nd regiments of Whoampo School occupied Danshui, they advanced to Haifeng. On 12 March 1925, the great Chinese revolutionary, Doctor Sun Yat Sen died in Peking. On the following day, the National Revolutionary Army scored a decisive victory over the forces of Chen Jionming, Canton warlord. This victory was the highlight of the First Eastern Campaign after which the Guangzhou government forces moved steadily forward.

In the meantime, the allied armies of the Yunnan and Guangxi warlords were preparing an uprising in Canton. On 10 May, Blyukher proposed his plan for fighting against the insurgents to the government. The plan was fully approved.

かつての孫文の支援者でもあった広東軍閥陳炯明は徐々に力をつけてきた広東政府に対し、攻撃をしかけようとしていた。特に、商団事件が広東政府の勝利のうちに結末を迎えたことは彼に大きな危機感を抱かせた。

広東政府側はブリュヘルの見解を受け入れ、先制攻撃に出た。第一次東征である。1925年、2月に戦闘は開始された。陳炯明の配下には、洪兆麟將軍や林虎將軍の歴戦の野戦の指揮官がいた。しかし、淡水の激戦に勝利を収めた国民革命軍はさらに、海豊に進んだ。その後、棉湖付近での決戦に決定的な勝利を得て、逃走する敵を追い、林虎將軍の根拠地梅県を占拠した。かくて、広東省東部から陳炯明の勢力は一掃され、彼らは福建省、江西省方面に逃がれた。しかし、この間、孫文が北京で死亡し、また国民革命軍の主力が東方出撃に出たため広東に不在であるのをについて、軍閥唐繼堯

が広州を狙い、それに呼応して孫文政府の《同盟軍》である楊希閔と劉震寰がクーデターを起した。東征軍はこれを鎮圧するために広州へ戻りそれに成功した。ここで初めて、自分達の軍隊だけで広東政府を守ることができた。広東は名実共に国民革命の根拠地となった。

以下はこの作戦の軍事顧問 А.И. Черепанов の回想録〈Записки Военного Советника в Китае〉1976, НАУКА の中の 210 頁～249 頁の全訳である。

遭遇戦が起った後、洪兆麟將軍の主力部隊は東方に退却した。林虎將軍の軍隊についての情報は全く届いていなかった。

広西《同盟》軍の司令官劉震寰は香港から広州に戻って来たが、彼の軍隊は相変わらず愚図愚図していた。雲南軍がやっとのことで博羅を占拠した。

我々のグループ（第2師団及び第7旅団）の北方縦隊は攻撃に移り、2月21日に敵と接触しそれを撃退、精力的に追撃して2月27日朝10時に海豊を占拠した。黄埔軍校連隊は敵と大きな衝突もなく、同日の夕

方頃までに海豊に近付いた。

これより前に、軍官学校生徒中隊は砲艦《永豊》号に乗船し、敵の背後に上陸する予定だった。しかし、海に出ると艦長は敵の軍艦が我が方の砲艦を迎撃するために出撃したことを無線で知った；彼は仰天し、生徒中隊を下船させ、自分は広州へ急いで逃げ去った。

2月23日、海豊に総司令官許崇智とВ.К. Блюхерが到着した。敗北し、士気を失った洪兆麟將軍の軍隊はその時すでに逃げ去っていた。——一部は河口へ、一部は陸豊へ。

恐らく慎重な行動から積極的な行動に移ろうと決意を固めたと思われる、林虎將軍の部隊が河源地区から移動し始めたという第一報が届いた。

雲南軍第2軍団長范石生將軍は自分の軍隊を博羅から西方——広西、梧州付近へ引き揚げ始めた。

広東省南西方面で、第1広州師団が沈鴻英將軍の部隊を撃破した。彼は孫文の《同盟者》から陳炯明の同盟者に、うまく鞍替えしていた。

林虎軍が進撃しつつある、という報告は許崇智や他の將軍達を不安にさせた。元気がよかったのは第2師団長張民達のみであった。

В.К. Блюхерはできる限り早く東方への出撃を再開するよう提案した。それは洪兆麟の軍隊に止めを刺すためであり、また敵の主要な基地、揭陽、汕頭、潮州を3月8日～9日までに占拠し、揭陽付近の道路の交差点で林虎將軍の軍隊と交戦する準備をするためであった。范石生が政府に対して反乱を起こすのを未然に防ぐため、予備軍から広州第1師団第1旅団と第3師団第6旅団を早急に移動させ、広州自身に集中させる決定がなされた。さらに、雲南軍が広州を通過して広西へ移動した後、上記の2個旅団と呉鉄城の1個旅団を石竜に派遣し、汕頭に向かって進撃中の軍隊の背後を固めることをそれらに委ねることにした。

2月28日、次の指令が出された：黄埔軍校連隊、第7旅団、第16連隊は河口、普寧を通過して揭陽に向かい、遅くとも3月6日以前にこの町を占拠する；第2師団は陸豊を通過して前進し、そこから1個旅団を潮州に派遣し、黄埔軍校連隊及び第7旅団を支援する；第7連隊は汕頭を占拠する。この連隊と共に第2師団長張民達も前進した。

この間、敵情に関して矛盾した報告があった。一つの情報では、陳炯明の軍隊がすでに汕頭を放棄している。もう一つの情報によると、洪兆麟將軍の上陸部隊が三隻の船に乗って汕頭に現われ、その商人達に20

万ドルを要求し、断わったら町を破壊すると脅迫した。

陳炯明が林虎に当たった電信を傍受したところによると、陳炯明は自己の軍隊を数隻の船に乗せ、3月4日汕頭に向かった。しかし、気持が变り、3月6日夜、彼は軍艦に乗って厦門(アモイ)に向かった。だが、7日に汕頭は敵、即ち我が軍に占領された。

我々はまた、洪兆麟の電信を傍受した。それによると、敗北を喫した後、彼の軍隊の大部分は大埔に退却したが、將軍の方は2個連隊と警備隊を連れて東方、潮州方面へ退却した。

このため、我々の司令部はこの時すでに普寧に到着していた莫將軍の旅団に対して、強行軍で汕頭へ向かい、北方からその市を攻撃するよう指令した。両方の縦隊にとって大きな障害となったのは川であった。3月7日によくその川を渡河できた；その時、英国の旗を掲げた砲艦に乗った第7連隊の1大隊が、若干の撃ち合いを行った後、汕頭へ突入し占拠した。

我々北方縦隊は二つの梯団で前進した；通常、第1梯団(第7旅団)は第2梯団(黄埔軍校の連隊)の前方、2日行程のところにあった。第7旅団は3月3日、河口の戦闘の後、捕虜や小銃の外に書類を押収した。それによると、洪兆麟將軍が林虎に援助を要請していた。

3月4日22時頃、黄埔軍校連隊は馬路地区に宿営した。思いがけず、次のような情報を入手した。それによると、林虎將軍の部隊が海豊に向け移動中であり、さらに先遣支隊がすでに河田から約15kmの地点に出現した。そこには我々司令部の要員が到着しているはずであった。これを知って、В.А. Степановは一時的に黄埔軍校の前進を止め、司令部に援助を与えるよう蒋介石に提案した。しかし蒋介石は、そもそも彼等には警備隊があり、また彼らの安全のために前進を止める必要はない、と言明した。後で解ったことだが、許崇智將軍の司令部は予定された地点に留まらず、黄埔軍校の連隊にできるだけ早く追いつくために、前進を続けた。

3月7日夜、第7旅団は敵が放棄した潮州を占拠した。黄埔軍校連隊は3月6日揭陽に来ていた。次の日、そこへ許崇智將軍の司令部も到着した。かくて、潮州——汕頭作戦は終結した。

この時期の作戦を総括する際に注意しなければならないことは、収入を得るために誰よりも早く町や村を占領しようとする気持が以前から、將軍達の間に存在していたことである。時には、この事が戦闘中の部隊の連係行動を妨げた。普寧、揭陽、潮州のような大き

な町では、そこを占拠した將軍はただちに自分の《代官》を任命し、税を徴収し始めた。これらの《英雄達》は誰もかれも敗北の危険を省みず、まっしぐらに突進しようとした。この結果、兵団の司令官の間にお互いの相手に耳を貸さない、敵意が生まれた。第7旅団長は第2師団長を嫌い、第2師団長はまた、蒋介石をひどく嫌っており、一方、蒋介石は許崇智將軍に我慢ならなかった。という具合であった。このような事すべてが軍隊の作戦指導を調整する仕事を複雑化した。

孫文を記念して

1925年3月12日、偉大な中国の革命家、孫文博士が北京で亡くなった。翌日、彼の創設した国民革命軍が敵に対し、決定的な勝利を収めた。これは彼を記念する最良の捧げ物となった。この勝利が第一次東征のクライマックスになった。その後、広州政府軍は留まるところなく前進した。第一次東征に参加したのは比較的少数の兵団と連隊であった。指揮官の間の情報交換が毎日どころか、毎時間行われたに違いない、と思われるかもしれないが、実際はそうではなかった。広大な地域では、軍の小さなグループは点在して見えなくなった。貧弱な連絡手段のため、指揮官達は戦況に関する適時な情報を利用することができなかった。

汕頭を占領した後、黄埔軍校の連隊の顧問達、Васильев, Палло, Никулин, Шнейдер と私は東征は事実上、すでに終了したと判断し、我々は一日、自分の部隊を離れ、町を見物できると思った。В.А. Степанов の許可を得て、我々は揭陽を出発し、小さな快適な港町、汕頭へ向かった。そして、ホテルで夜を過し、普通のベッドにゆったり寝そべった。朝は《市民》のテーブルに坐って気持よく食事をする事ができるだろうと期待し、ソーセージ付きの卵料理の朝食を夢見た。突然、ホテルに Шалфеев が現われた。彼は以前、П.А. Павлов と一緒に当地にやって来て彼の副官となり、Павлов が死んだ後、Блюхер の副官となった人である。彼は我々に顧問団長が駅にいる自分の所へ、至急来るよう言っている、と伝えて来た。Шалфеев の普段とは異なった、ひどく深刻な顔つきから推して、我々は何か良からぬ事が起ったことを悟った。多くを聞きたださず急いだ。我々を待ち受けて、プラットホームを神経質そうに行きつ戻りつしていたのは Василий Андреевич Степанов であった。

—— やっと来た —— 彼はかなり無愛想に言った。

—— 団長の所へ出頭しなさい。

自分の車輛の中で、Блюхер は陰気に我々の方へ目を向け、身振りで坐るように勧めながら言った。

—— 我々の東征は今や真最中である。我々は決定的な優勢を得てはいない。それ故、遊覧のために何時間も割くことを許すわけにはいかない。В.К. Блюхер は В.А. Степанов に向かって言った。—— 今後、私が許可した場合のみ外出が可能である。

汽車が潮州に向け動き出した。

—— 我々が諸君の向かう駅に到着するまでに、私は諸君に状況を知らせ、当面の任務を与えよう。—— と Блюхер は続けた。—— 地方住民や捕獲した文書から、3月4日、林虎將軍は自己の兵力を興寧地区にすでに集中しており、洪兆麟將軍の軍隊を援助するために、海豊方面に出撃していることが判明した。林虎將軍の先遣部隊約2,000名が河婆の北方15kmの地点で認められた。3月5日、未確認ではあるが、追加情報を入手した。敵の主力(6~7千名)がすでに河婆へ向かって進撃を続ける任務を持って、安流に到着した。我々がすでに知っているように、洪兆麟將軍の軍隊は二つのグループで退却している：一つは大埔及び松口鎮に向かって、他の一つは潮州の東に向かって。

В.К. Блюхер は更に詳しく説明した。我が軍は次のように配備されている：第16独立連隊を含む第2歩兵師団と許崇智將軍の司令部 —— 汕頭、第7旅団 —— 潮州、黄埔校連隊 —— 揭陽；第1旅団と呉鉄城の旅団 —— 海豊地区。

將軍達、特に蒋介石は敵の動きについての情報を信じなかった：彼らは河婆及び海豊に対する林虎軍の進撃を、全く示威行動にすぎないと考えていた。彼らの予想によると、林虎軍の主要な攻撃は北方から湯坑 —— 揭陽の線に向かって加えられるはずであった。

しかし、3月10日、最終的に次のことが判明した。林虎軍は湯坑方面ではなく、河婆に向かって進撃しており、彼の先遣部隊はすでに馬路地区に出現していた。こうした事があってようやく、許崇智將軍は河婆地区の敵を撃破する、という私の提案を受け入れた。黄埔軍校連隊、第7、第1旅団及び呉鉄城の旅団がこれに充てられた。第2師団は汕頭から潮州へ移動し、状況に応じて、北方又は北西方面に対する攻撃に充てられるはずであった。第7旅団が到着するまで、黄埔連隊は揭陽地区で防衛態勢に移り、その後、第7旅団と共に河婆へ進撃するよう指令を受けた。

Блюхер は続けた。—— 3月11日、矛盾した情報を

入手した。一つは、敵が五経富めざして出撃した、というもの；もう一つの後から入った情報は、敵の主力が河婆に集結している、という以前からあった情報を確認したものであった。敵が河婆にいたことが最終的に判明し、この戦域でそこを攻撃する、という決定がなされた後でさえも、蒋介石は相変らず、自分の先入観を持ち続けた。それ故、彼は我々の助言を実行できないようにさせようとし、私と Степанов に黄埔軍校連隊だけ、あるいは第7旅団のみを、河婆に派遣するよう提案した。

許崇智將軍は最初、私の計画に同意したが、蒋介石の影響で、動揺し始めた。彼は全兵力を河婆に向けず、第7旅団の1個連隊、黄埔軍校の部隊から2個中隊を揭陽に残すよう決定した。そして、全般的に揭陽から軍隊を出撃するのを遅らせた。許崇智は何らかの新しい情報の入手を待っているのだ、と言った。決められた兵力全体を適時に、河婆に進出させるよう、許崇智と蒋介石を説明するのに私はひどく苦勞した。——自分の部隊に急ぎなさい。遊覧に夢中になってはいけな。Блюхер は怒りを和らげて微笑んだ。そして、別れる時、我々と固く握手した。

3月12日、黄埔軍校連隊は普寧を通り、棉湖に進出した；揭陽を出発した第7旅団の2個連隊は Nangi 河の北岸を進んだ。どうしても司令部を説得して意見を変えさせることができなかった；旅団の1個連隊と黄埔軍校の2個中隊は相変らず、揭陽に残されていた。

13時、何応欽將軍は敵がどうやら河婆から湯坑に去ったようだ、という情報を現地の人から入手した。その後、途中で出会った住人から異った情報を入手した：敵は今朝、各3,000の兵員を持つ、2つの縦隊で我々に何かつて出撃して来ている。1つの縦隊は棉湖に向かい、他の1つは Nangi 河の南岸に沿って鯉湖に向かって進んでいる。北東に向かう敵の動きのいずれも、これらの住民は知らなかった。

15時頃、その情報が В.К. Блюхер に伝えられた。彼は許崇智と蒋介石両將軍に、3月13日、敵の右側面に主要な攻撃をかけるよう提案した：第7旅団と黄埔軍校第1連隊は敵を南方に撃退する。黄埔軍校第2連隊は兵力の一部を第1連隊の支援に割り、残りの兵力は敵の南方グループを攻撃すること。

3月12日、我が軍は次の地点に宿営した：第7旅団——揭陽の西、Nangi 河の北岸：黄埔軍校第1連隊——棉湖（1個大隊は Nangi 河の左岸）：第2連隊——棉湖の南東：第2師団——潮州。西方から河婆

に向かって進撃していた旅団からは何の情報も届かなかったが、恐らく河婆から半日行程の所にある、と思われた。

第1連隊は3月13日朝6時、棉湖から馬路へ進撃することになっていた。しかし、何応欽將軍は蒋介石の何らかの指令を待っている、と言って進撃を引き止めた。これは蒋介石が急ぎたくない（第7旅団に戦闘の主要な困難を引き受けさせる）と思った時に彼が良く使う例の手であったのか、それとも林虎の進出しつつある軍隊が西からではなく、北から来ると、相変らず彼には思われたからなのか、わかっていない。ついに、我々の圧力のもとで、第1連隊もやはり馬路へ向け出動した。連隊長、彼の参謀、及び我々顧問は通常、縦隊の先頭を進んだ。今回は攻撃を遅らせないために、第1大隊が我々を待たずに、先頭に立って前進するよう、何応欽將軍に勧めた。我々は Shanhu 村の西方にある河の分岐点で第1大隊に追いつく予定であった。

例によって、大隊長は斥候を出さず、また警備隊も組織せず、ただ当地の農民達が彼に伝えた、敵が湯坑方面に去ったという話を聞いただけで行動した。同じ情報を我々も最初の村で入手した。

結局、朝9時、前衛の大隊が山のふもとで、不意に敵の銃火に遭遇し、戦闘のために展開した。多分、敵が湯坑に退去した、という噂を自分達で前日に故意に流したのであろう。第1大隊長はこの《情報》をそのまま本当だと受けとり、周囲に全く注意を払わなかった。彼はこの戦闘での最初の負傷者の一人となり、戦列を離れた。戦闘が始まると、我々は小さな高地に登り、また畑で働いていた農民にその土地の特徴をくわしく質ねて、状況を良く知ろうとした。幸いなことに、後で解ったことだが、彼はその土地を良く知っていて、我々に正しい情報を与えてくれた。我々の前に、いくつもの丘が円形劇場のように横たわっていた。

小さな丘陵の上から、敵の部隊の展開がよく見えた。我々の連隊の前にいるのはせいぜい2千名程度の部隊であり、これは恐らく、敵のいくつかの部隊の一つにすぎないものであろう。他の部隊は第2連隊に向かって、行動を起しているであろう。

それ故、敵の右翼を攻撃するという В.К. Блюхер の計画に基いて、私と Никулин は第7旅団が到着する前に、《B》高地にいる敵の左翼を攻撃するよう、何応欽に提案した。それは敵の兵力を自分の方に引きつけることによって、第7旅団が側面及び後方を攻撃することができるようになるためであった。第7旅団がどこ

にいるのか、我々には正確にはわからなかったが、射撃音を聞きつけて旅団が援助に急ぐであろう、一方、第2連隊はあらかじめ決められているように、我々の連隊の左翼を援護するため、自己所属の1個大隊を派遣するであろう、と考えた。

今回は、何応欽の感情の激発はいつもより早く治まった；彼は我々の提案を受け入れ、第1大隊に《D》高地の北にある河の分岐点の方向へ攻撃するよう指令した；第3大隊には敵の左翼を包囲しつつ迂回し、高地《B》の東方斜面を攻撃するよう指令した。歩兵の斥候が2つの大隊の間の地域に出された。連隊本部は山頂《A》に留まった。我々はその間に大砲を持っていた。それが第3大隊の攻撃を支援するはずであった。

我々の左に来るはずになっていた第2連隊の大隊を我々は見出すことができなかったのも、学兵連の部隊を梯隊で前進させ、側面の安全を期した。

第2大隊は予備軍として残された。それを必要な時に、右翼の攻撃強化のために第2梯団として利用するつもりであった。敵が高地《D》から第1大隊の左翼を攻撃し、それに多少でも圧力を加えた場合、第2大隊に必要な指令を出すつもりであった。大隊は打撃から急速に回復し、小さな高地を死守した。同時に、かなりの敵の兵力が高地《G》《D》《J》の線に展開し、特に我々の左翼と相対しているのを、我々は認めた。後で判明したように、これは戦場に向かっていた敵の第1師団の兵士達であった。

攻撃に移った我々の第3大隊は高地《B》にいる敵の、新たな兵力に阻まれた。捕虜から聞いて解ったことだが、我々に対して展開していたのは敵の旅団で、その左右両翼にはそれぞれ独立連隊が1個ずつあり、第2梯団には第1師団があり、総計5,000名に達していた。我々が後で知った第2軍団の兵員を考慮に入ると、敵は9,000の兵員を所有していた。我々の大砲は11時まで弾丸をすっかり打ち尽くし、沈黙した。

敵の新しい大きな兵力が《D》高地の南で、我々の左翼を迂回して攻撃に転じた。

ようやく第7旅団が近付いて来た、との情報を入手した。旅団長は我々に、山頂《B》の北方で敵の側面及び後方を攻撃し始める、と伝えてきた。

来ることになっていた第2連隊の1個大隊はまだ現われなかった。それどころか、この連隊がどこにいるのかさえ、我々にはわからなかった。第1歩兵師団が我々を迂回していると予想し、また我々の第7旅団が接近して来ることを考慮に入れて、我々は反撃のため

に第2大隊を使うことに決めた。こうして我々は敵を撃退し、我々の左翼をしっかりと堅めることができると予想した。大隊長に2個中隊で反撃を行うよう指令した。

第2大隊は敵の側面を攻撃し、潰走させ、追撃に移った。しかし、小さな雑木材の所で思いがけなく、敵の増援部隊の側面攻撃を受け、前進が阻まれた。左翼の後を追って梯隊で進んで来た大隊の予備軍の中隊が今度は、包囲している敵の側面を攻撃し、敵を守勢に転じさせた。

我々は朝食をとったかどうかを覚えていないけれども、主計関係の連隊副官が状況を考えて、我々に食事を用意することに決めた。中国の野戦食は米を大鍋で急速に煮たものであるが、急いで分配しなければならない。さもないと、それは冷めて、暖めなおすとばさばさになってしまう。副官は戦闘の真最中に強請した：《喫飯、喫飯》（食べろ）。その時、不幸なことに、敵が左から三度目の包囲を始めた。何応欽の命令により、学兵連部隊は決然と反撃に移り、敵の側面を攻撃、自分達の側面を伸ばし、敵をやや後退させた。

学兵連部隊の1個分隊以外の全予備軍が使い果された。状況が緊迫した。第7旅団はまだ接近中である。一方、敵は我々の左翼を包囲するために、第4縦隊を急速、高地から我が陣深く降ろして来た。唯一つ残された手段は、我々の最後の予備軍を戦闘に投入することであった。すると、全く予期しなかったことであるが、学兵連部隊の1個分隊が行った作戦行動と銃火のために、敵は包囲を中止し、翼をさらに伸ばすだけの作戦行動に留めた。

3時、第7旅団が攻撃に転じた。同時に、第3、続いて第1大隊も前進した。間もなく、高地《B》の敵は掃蕩され、退却を始めた。その時ようやく、連隊副官の喜んだことには、我々は食事を始めた。

突然、高地《V》方面から大砲の射撃音が聞こえ、続いて二発目が聞こえた。私は何応欽の袖をつかんで高地《B》を指し示した時、丁度彼は口を大きく開いて御飯を箸で口に運ぶところだった。何応欽はしばらくの間、口を開けたままだった。第7旅団の兵士達が混乱状態で退却してきた。彼らはどこかの陣地に留まって応戦するどころか、重機関銃を持つ銃手までも逃げ出した。

敵の旅団長は反撃のために、自分の親衛隊に至るまで全軍を投入したことが判明した。淡水付近での敗走の時、その逃げの速さから《騎兵隊》と綽名をつけら

れた第7旅団は自分の後に、我々の第3大隊をも一緒に連れ去った。この大隊の兵士達が河を渡って留まったのは立派だった。第3と第1大隊の間の裂け目が非常に大きくなった。そこで、敵がそこへ突進して来た。敵は高地《A》のすぐそばまで接近して来た。そこは我々の連隊本部であり、また野戦司令部でもあった。

司令部、参謀部、連隊長、顧問団、そして結局、我々に食事を与えることができなかった主計関係の連隊副官さえも防衛に従事し、全員が武器を取って敵を阻止した。

その間、第2連隊の作戦地域では一体、何が起っていたのか。

3月13日朝、第2連隊は3時間ほど前進に手間どった。顧問B.A. Степановは蒋介石にこの遅延を指摘したが、将軍は返答に何かとげとげしく叫んだ。Степановは聞きとれなかった。そして数日後にやっと、この叫び声は蒋介石が自分のところへ第2連隊長を呼ぶよう命令したものだ、と解った。連隊長は数km先にいたが、それにも拘らず彼を呼び寄せた。このため一時間以上も無駄にし、9時になってようやく、連隊はNangi河に沿って鯉湖に向かい前進を始めた。

10時頃、第2連隊長と顧問Паллоは右方向に銃声と砲声を耳にした。射撃音は断続的に11時30分まで続いたけれども、第2連隊長は命令の中で前もって規定されていたように、射撃音の方向へ急がなかった。そして我々の左翼を守るために大隊を派遣することさえも実行しなかった。鯉湖まであと2kmの所で、前衛として行軍していた第2大隊は銃声を時折り聞いた。大隊長は状況を十分理解しないで戦闘の準備をした：2個中隊を散開させ、一方第3大隊を右翼確保のために河向こうへ急いで送った。敵は近くにいたけれども、無論見つからなかった。30分間、無意味な混乱があった後、連隊は鯉湖に向かって行軍を続けた。

10時頃、蒋介石は第2連隊長から、敵は鯉湖には存在せず、12日すでに馬路へ去ったという報告を受取った。この報告によって、蒋介石は再び以前の先入観に戻った。つまり、敵は西方からではなく、北方から来襲する。そこで、彼はСтепановに黃埔軍校第1連隊と第7旅団を北方の五経富方面に向けることを提案した。B.A. Степановはこれらの部隊長達から報告が来るのを、しばらく待つように勧めた。

11時頃、蒋介石の参謀達が棉湖に到着した。丁度その時、第1連隊長からの報告を入手した。それによると、朝9時、敵兵員約2,000名を鯉湖の北の高台の上で

発見し、連隊は攻撃の準備中であつた。

B.A. Степановは第2連隊長にただちに鯉湖地区で河を渡り、敵の後方を攻撃し、それによって第1連隊を援助するよう、命令を与えることを勧めた。蒋介石はあたかもそれに同意したかのように、そのような命令を送った。10年後、二度目に中国で働いた時にはじめて、第2連隊長から聞いた事だが、彼が当時蒋介石から受けた命令は、B.A. Степановが固執した通りには進撃せず、ただ北方への移動を示すだけにしておくものであった。

結局、14時に連隊は出動した。半時間後、前方の高台に敵の大きなグループがいくつか認められた。

連隊長と顧問は第2大隊の兵力で正面から敵軍を攻撃し、一方、第3大隊は2丁の機関銃を装備し左翼に配置されるよう、決定が下された。

敵から2kmの所を発起位置として、第2大隊長は第4中隊を正面攻撃に、第5中隊を右翼からの包囲攻撃に向け、一方、第6中隊を右翼の後方に予備軍として残した。

第4中隊は機関銃の援護射撃を受け、白兵戦で断固、攻撃に転じた。敵は大隊が展開した時には少しも行動を起こさなかったけれども、思いがけず、約1,000m離れた所から中隊に向けて、強力な銃火を浴びせた。これを受けても第4中隊は前進を遅らせなかった。中隊は500~600m敵に近付き、敵に高地を放棄させた。

第2大隊は約2km離れて退却している敵を追撃した。18時までに戦闘は終わった。戦いのあらゆる困難を、精力的な劉堯宸の指揮下にある第2大隊が自ら引き受けた。彼は第2次東征の際、惠州強襲の英雄になった。

夜、高地《A》にある第1連隊の戦闘司令部に、B.K. Блюхер、B.A. Степановと蒋介石がやって来た。連隊長、各大隊長が戦況を報告している時、蒋介石はコーカサス製の袖無し外套を着て、絶えず重苦しい溜息をついた。それから私に向かって質問した。《敵は去って行くだろうか》。彼は否定的な答えを聞くのを明らかに恐れていた。敵が夜のうちにできるだけ遠くへ去るかどうかは、あたかも私の願望次第であるかのようにであった。——もし去らなければ、捕虜にするだろう。そのためには、第1連隊に牽制されて自由のきかない敵軍の側面と後方に対して、第7旅団と第2歩兵連隊が早朝、猛烈な攻撃をかけねばならない、と私は答えた。

——私も同じ結論に達している——とB.K. Блюхерが追認した。

我々の計画に対して蒋介石の同意が得られたので、

許崇智將軍を通して必要な指令を出すために、顧問団長 Блюхер はすぐに出発した。

蒋介石は尚しばらく我々のところに留り、大隊長から正確な損害の大きさを聞きとった。大隊長達は本当の状況を知らず、戦死者や負傷者の数をひどく過大視していた。

我々は夜間、必要な再編成を行い、第7旅団及び第2連隊の攻撃開始を待つことになった。高地《B》の上で明らかに、何らかの動きが見られた：敵は去っていなかった。しかし、一体何故、左右両翼の友軍は戦闘を開始しないのか。相談の結果、我々は再び、先頭を切って戦闘を始めることに決め、砲兵隊の指揮官に高地《B》に対して砲火を開くよう指令した。

我々の一発の射撃で、合図のラッパが高地に響いた。そして、何かが揚っているのが我々の目に入った。それは国民党旗であった。全てのことが容易に明らかになった。戦闘に疲れた第1連隊の部隊は偵察を出さなかった。そこで暗がりの中で敵が退却したことに気づかなかった。不名誉にも前日逃げ出した第7旅団は、当地の住民から敵軍が退却したことを知り、残された戦利品を収集するために、まだ夜が明けないうちに、再び昨日の戦場へ自分達の部隊を送り出した。

棉湖付近の会戦に参加した一旅団長が林虎將軍に送った報告書を、我々は後になって入手した。それによって我々は、敵の行動を詳細に知り、敵に巨大な損害を与えたことを知った。

第1連隊の兵、下士官、士官、小中隊長、政治委員の、前例のないような勇気、忍耐力、不屈さにぶつかって、数に於いて7～8倍勝っている敵が撃破された。革命思想が軍閥の反動に打ち勝った。

この闘いに於いて、東征の成功を確実にし、林虎將軍の軍隊を壊滅させるために可能なことは全て実行された。В.К. Блюхер の計画に従って、予備軍から配置された旅団が適時に海豊地区に集められ、我が軍の後方が確実に守られた。3月13日、また Блюхер の提案に基づいて、敵軍に罠が用意された。もし、蒋介石が第2連隊の前進を遅らせなかったら、この罠はきっと完全に、敵を包囲してしまったであろう。

敵軍の指令官劉志陸は後に解るように、蒋介石が一再ならず敵に与えた《黄金の橋》に感謝しなければならなかった。

蒋介石は相変わらず、はるか後方の司令部と共に居り、会戦中、戦闘を直接指揮することは全くなかったけれども、度々自ら干渉して、作戦中に戦闘を止めさ

せた。棉湖付近の戦闘を残らず書き尽すために、陳銘枢の第1旅団と呉鉄城の旅団の作戦行動について少し触れてみよう。

3月10日、呉鉄城旅団は海豊に、第1旅団は公平にあった。これらの部隊の総兵員数は3千名であった。

3月11日13時、許崇智將軍から二人の旅団長に、敵が普寧に近付いて来つつあるという連絡が入り、さらにまた次の命令があった：3月13日、日が暮れるまでに河田に到着すること。3月13日朝、2個旅団は河田に近付き、(呉鉄城旅団は右から、第1旅団は左から)その町を攻撃した。そこを占拠していたのは劉志陸將軍の第2軍団第2連隊であった。

敵は不意を襲われ、兵士達は無抵抗で四散し、103人の捕虜を残した。その中には、連隊長1名、大隊長2名がいた。

3月13日18時、旅団長達や顧問 Зильберт が加わって、14日朝から河婆を攻撃する決定がなされた。しかし、敵は夜間に、戦闘を交えず町を去った。河婆から呉鉄城の旅団の先頭を進んでいた独立連隊が北方へ向かって退却している敵軍を追撃する目的で、派遣された。連隊は5～6kmの所で、兵員600名の敵の部隊にぶつかり、戦闘に入った。旅団長達は独立連隊を援助する代りに、会議や論争を始めた。そして時機を逸した：林虎の軍隊は迂回路を使って北方へ去った。総体的に言うと、敵の後方に於いて2つの旅団がとった行動は棉湖付近で会戦する敵軍に対して、大きな援助を与えたことになった。

東 征 の 終 結

3月14日、昨日の戦場に於いて軍事会議が開催された：参加者は蒋介石、許崇智、何応欽の各將軍、顧問の Степанов, Никулин と私であった。

許崇智の情報によると、敵の主力は五経富と、更に遠い湯坑方面へと去った。蒋介石はこの情報が林虎將軍の進撃は西からではなく北からであろう、という彼の以前の推論と一致するので、この意見を喜んで受け入れた。彼が唯一不同意しなかったのは全兵力で敵を追撃する、という許崇智の要求であった。蒋介石は第7旅団のみを使ってこれを行い、黄埔軍校連隊は当地に残しておくことを提案した。

В.А. Степанов は敵が五経富に退却した、という情報を信じなかった。そこに到る道は殆どなかった。彼は蒋介石の基本的な考え方——できるだけ戦火から離

れて身を守る——もまた理解した。それ故、Степановは妥協的な解決法を提案した：第7旅団を北方、五経富に向かって出撃させ、一方、海豊グループを出迎えるために、黄埔軍校連隊を河婆に向かわせること。彼のこの案は、馬路に行けば敵の主力がどこへ退却中であるかが明らかになるであろう、という簡単な計算から出たものであった。海豊グループと合体することによって黄埔軍校連隊の縦隊は強固なものとなろう。將軍達はB.A. Степановの提案に同意した。黄埔軍校第2連隊は3月14日、河婆に到着するよう命令された。

夜遅く、蒋介石の参謀達と第1連隊がいた馬路に、第2連隊と海豊グループとの合体の報告が届いた。B.K. Блюхерはこの時まで馬路に到着していた。

3月15日、我々は馬路から河婆へ向かった。

3月13日、敵と思いがけない小競合があった後、(偵察と警備が行われなかったため)連隊本部は今度は、全く逆な態度をとった。本部は第2連隊がすでに通過した地域を、念入りに偵察し、警備した。そこには敵がいるはずはなかった。この場合には、これらの予備措置は無用であったが、私とНикулинは反対しなかった。逆にうれしく思った：現実が將軍達に警戒することを教えた。

夜、河婆に於いて、林虎將軍を興寧方面に向かって3月16日に追撃を続行することが決定された。主要な任務、つまりB.K. Блюхерの提案に基いて、退却中の敵軍を撃滅するために、黄埔軍校連隊、第1旅団、呉鉄城旅団から成る突撃グループを創設し、その全体の指揮を蒋介石がとった。3月19日、このグループに興寧と五華を占領する任務が与えられた。一方、第2師団、第7旅団及び独立連隊は直接、許崇智將軍の指揮下にあり、このグループを援助することになっていた。

3月16日夜、蒋介石のグループはAndingbaに到着した。そこで当地の住民から、敵の前衛部隊が我々の前哨部隊からわずか5kmの所におり、敵の主力は安流の南に防衛陣地を準備した、という情報を入手した。兵員1千名の敵部隊が我々の右翼にあてられ、左翼に対したのは兵員2千名から成る李易標將軍の第4軍であることも伝えられた。蒋介石の参謀達の推計によれば、全部で1万名の兵が我が軍に対抗して集められた。

グループの管理下にあったのはわずか5,000名であった。將軍達は何をしいのか解らなかった。黄埔軍校連隊と第1旅団(3,500名足らず)で敵の主力を攻撃、呉鉄城旅団(1,500名)は予備軍として残す、というB.A. Степановの提案はいかなる反対もなく了承

された。敵軍を北方から包囲するため、三方向から集中的に攻撃を行う戦術をとることが決定された。3月17日、敵は思いがけずも退却した。安流は戦闘を交えず、我々が占拠した。当地住民や投降者の証言によると、敵の主力、約7千の兵は北方へ退却したけれども、李易標將軍の部隊は北西、湯坑地区へ退却した。

黄埔軍校連隊と第1旅団の一部は徒歩用の狭い橋を通り、また残りは浅瀬を徒渉して強行渡河し、夜遅く、湯坑地区に集結した。敵はここを通ったのではなく、更に東を、小道を通して行ったことがわかった。我々の部隊を秘密裏に五華—興寧地区に投入するに都合な情況が生じた。50kmの強行軍を遂行し、3月18日に五華を占領する、という決定がなされた。

3月18日22時頃、極めて困難な山道を克服し、敵の不意をついて五華に接近し、その町を包囲した。後で知ったことだが、蒋介石はいつものように、敵に逃げ道を残すことを忘れなかった：興寧への道は自由に通れる状態だった。敵兵500名が夜間、妨害されることなく興寧に向かう道を退却し、その際、2丁の機関銃と電話設備を残して行った。第4師団参謀長及びその他の将校達が捕虜になった。彼が敵を《解放した》と非難されるのを恐れて、何応欽は顧問達には知らせず、敵軍は五華にはいなかった、と司令部に報告した。

3月19日11時頃、黄埔軍校第2連隊と第1旅団は興寧に向け出撃した。何応欽の報告に基いて、我が軍は全く警戒せず行軍していたところ、不意に近くの高地から銃火を浴びた。なるほど敵はすぐに退却はしたけれども、南方の配下の部隊のところへ行こうとしていた林虎將軍のもとに、我々が五華を占拠したという知らせが届いた。今や、林虎は興寧の商人達に町を立ち去るように呼びかけた。何故なら《自分があくまで町を守るつもりだった》。

かくて、不意打ちの可能性は無くなった。町の城壁の所で、我が部隊は組織的な防衛部隊に遭遇した。この間、黄埔軍校第1連隊は休息をとるため、五華に留まっていた。約2千名の敵兵がHengbei地区から我々が来る際通った道路に沿って、我々に向かって進撃中であり、その縦隊の前衛部隊がすでに町へ近付いて来ている、という情報が入った。

蒋介石は興寧攻撃を中止し、接近して来る敵に対して全兵力を投入しようとした。しかしB.A. Степановの精力的な干渉によって、この計画は未然に防がれた。

出現してきた縦隊を攻撃するために、黄埔軍校第1連隊を残して、蒋介石は自分のグループの参謀と一緒に

に興寧攻撃に向かっている部隊へ移動した。16時頃、興寧から2 kmの所で第1旅団の予備連隊に追いついた。旅団長、陳銘枢が3月19日付けの戦闘命令は遂行できなかった。と知らせてきた。黄埔軍校第2連隊は南側の城壁を、第1旅団は北側の城壁を攻撃し、町を占拠し終わった後合流するはずであった：第2連隊は町の南はずれの向こうの村々に在り、第1旅団は梅県へ向かう途中に在った。

実際には、全てがうまくいかなかった。第2連隊の先頭大隊は町の城壁の所で組織的な反撃を受け、大隊長が負傷した後、前進を止め、町の門を監視するのみであった。連隊の主力は《予備軍》として後方に置かれた。第1旅団は大した理由もなく、1個連隊で町の南3~4 kmの所にある高地を占領した。他の連隊もまた《予備軍》に在った。軍全体がその場所を動かず、何もやろうとしなかった。敵の兵力は我々のものと比較すると、取るに足らないと思われたけれども、城壁と水でいっばいの堀は攻撃をくい止めた。B.A. Степановの提案が受け入れられた：夜の暗闇を利用し、梯子の助けで突撃をし、町を占領すること。急襲は20時に黄埔軍校第2連隊が行うことになった。主要な攻撃点は城壁の出口である南門と決められた。第1旅団はその1個大隊が第2連隊の攻撃を北門と西門の方向から援護し、残りの兵力を興寧の南東にある村に集結させるよう指令された。

B.A. Степанovは南からの増援部隊が敵に近付くことを恐れ、攻撃を急がせた。それでもやはり、決められた時間に攻撃は行なわれなかった：敵が南門の所にいた中隊を包囲した時、第1旅団はまだ第2連隊の代りをするのができなかった。このことに関して、B.A. Степанovは敵の反撃が完全に撃退されるまでは、町の強襲を延期するよう提案した。

呉鉄城の旅団がHengbeiでの短い戦闘の後、錫坑に退却したという知らせが届いた。蒋介石の頭に、即座に新しい《アイデア》が浮んだ。——河口に下って、Hengbeiの敵を撃破する。その後、興寧に戻る。興寧近付で十分練った作戦を台無しにしないために、また同時に蒋介石を落着かせるために、B.A. Степанovは南からの奇襲を未然に防ごうと、黄埔軍校第1連隊を五華から南東12 kmにあるQuaninbu地区へ移動させるよう提案した。これは3月20日に実行された。

夜のうちに興寧近付での軍の再編成を完了した。3月20日6時から9時まで興寧の南の高地で撃ち合いが起った。町の守備隊が出撃しようとしたが、不成功

に終わった。南東から攻撃しようとしていた敵は撃破され、約100名の捕虜とほぼ同数のライフルを捕獲した、と第1旅団長が10時に報告してきた。12時、蒋介石は第2連隊の作戦地区に立寄り、16時に南から町を攻撃し始めるよう決定した。主要な攻撃は第1旅団が受け持ち、第2連隊はその1個大隊がそれを支援し、その後攻撃を開始した時、残りの兵力が町を強襲することになった。

14時、捕えられた将校を尋問した結果、敵と第1旅団との朝の小競合いの詳細が解った。

林虎將軍は19日朝、普寧地区にいた自己の最良の部隊である第3師団に対して、急いで興寧に行くよう電報で命令を出した。その師団は第5、第6旅団で構成され、総兵員は約2500名で、11時出撃した。23時までに50 kmの行軍をやり遂げ、興寧に接近した。そこで、その前衛部隊が我が第2連隊の包囲された中隊と交戦した。朝4時、状況を充分把握せず、第3師団長は配下の第5旅団に、興寧の南にある高地を攻撃するよう命じた。

第1旅団の1個中隊が山から、他の連隊が河沿いに攻撃を加えたのを受けて、敵軍は包囲され、捕虜になった。8時までに敵の旅団は掃蕩された。旅団のほとんどの指揮官が捕虜になるか、葬り去られた。全部で約700名の兵士と50名の将校が捕えられ、大量のライフルが捕獲された。14時頃、捕虜と戦利品がグループの本部に届けられた。一方、敵の第6旅団は戦闘に参加しなかった。

丁度16時、命令を受けたかのように、黄埔軍校第2連隊に《恩恵をほどこした》唯一つの大砲と機関銃の助力をもつ陳銘枢將軍の第1旅団が敵の第6旅団に向かって攻勢に転じた。敵はその時、興寧の南側にある河の東岸に陣取っていた。22時頃、陳銘枢から、敵は陣地から追い払われ、北東へ退却しつつあり、その際多量のライフルと捕虜が手に入った。という知らせが届いた。24時頃、黄埔軍校第2連隊第9中隊が町の南門に突入した。その後に連隊全体が続いた。本部でこのことを知ったのは3月21日夜、3時頃であった。その間、蒋介石は理由は解らないが、顧問に知らせず真夜中第1連隊に命令を出した。それは呉鉄城の旅団を迎えるために河口に向け出発し、それと合同で梅県に進撃するという内容であった。強襲が成功したとの知らせを受けて、顧問は蒋介石を起こし、第1連隊を南ではなく興寧へ向かわすよう説得しようとした。もし敵を大至急追撃する組織をつくることができれば、北

から敵の退路を断ち、包囲してきたであろう。蒋介石はあらゆる言い訳をした後も、相変わらず自分の意見に固執し、顧問の意見に腹を立てた。今までの慣例に反して、蒋介石は興寧でB.A. Степановと事前に意見を交換せず、3月21日すでに第2連隊と第1旅団に今後の作戦行動を指示し、後になってはじめて、それを顧問に知らせた。蒋介石の指令は次の通りであった：黄埔軍校第2連隊は大龍田方面に出撃し、第1旅団は1個連隊を以てGeshugan方面に出撃。第2連隊は町の東門に残ること。

蒋介石がこの指令によってどのような目的を追求しようとしたのか解らなかつた。後で明らかになった様に、彼は敵がどこにいるのか知らなかつた。蒋介石の本部は第3師団の残存部隊に関してのみ情報を持っていた。彼らは林虎の軍隊と一緒に江西省へ去って行った；敵軍の南グループについては何も知らなかつた。これらの事を考慮し、また夜戦の後で休息を与える目的で、B.A. Степанovは南方へ偵察を出し、第1連隊からの報告を待つよう提案した。それ以外に、黄埔軍校第1連隊と呉鉄城旅団を興寧へ戻す必要があった。蒋介石は言葉の上では同意した。第2連隊の先頭大隊は指示された方向へ出発した。李易標將軍の指揮下にある2千名から成る敵の部隊が町の南東6~7kmの所に、攻撃のために集結しつつあることが10時頃判明した。そしてやっとこの時になって、B.A. Степанovはすべての部隊が実際には、蒋介石が以前口頭で行った命令を実行していることを知った。黄埔軍校の第2連隊はどこにいるのか、という質問に対して、蒋介石はいつもの通り答えた：《知らない》。しかし、第1旅団に関しては次のように言った：《恐らく、当旅団はGeshugan方面へ敵を進撃中であろう》。実際には大龍田にまで散歩に行ったのは第2連隊の1個大隊だけで、第1旅団は文書による命令書を待って、その場から全く動かなかつた。もっと簡潔に言うと、自分の部隊がどこにいるのか、敵の部隊がどこにいるのか、正確にはつかめていなかった。B.A. Степанovは再度、斥候を出すことを提案した。実際には、敵は最初の斥候が指摘した地区に以前にはいたけれども、その後東に去ってしまった。第1連隊の報告を待つことに決まった。

黄埔軍校連隊と第1旅団が五華に去った後、敵の主力部隊を監視するため、呉鉄城旅団は安流——河口間の道路上に留まるよう命ぜられた。呉鉄城は撤退せざるを得ない状況になった場合、貨物や弾丸を隠しておくために小部隊を残し、五華へ移動するように、とい

う命令を受けた。旅団は3月17日にLiyuqianに、3月18日に錫坑に宿営することになっていた。五華は3月18日に占拠する予定であった。このように、呉鉄城旅団は敵の主力の前に2,3日立ちはだかる予定であった。

3月17日、旅団はLiyuqianまでは到達せず、その南8km, Haoyuanに泊った。しかし、3月18日午後、錫坑に接近し、そこを占拠した。

全ての報告から結論できることは、呉鉄城旅団の前面には、敵の主力——約1万の兵が相対しているということである。

敵の哨所のすぐ近くに前哨を配置し、1個大隊が瞰制高地を占拠した。敵の優勢な兵力を恐れる理由はなかった。いつでも五華に向かう道路に沿って、本隊の方へ撤退することができた。しかし、旅団長代理（呉鉄城自身は広州警察長官としての任務についており、この東征には参加していない）やその他のすべての指揮官の志気はあまり高くなかつた。顧問Зильбертは彼らの敢闘精神を当にすることができなかつた。首脳部内のパニックは危険な敵になり得ると考えたのは当然であった。そこへまた、次のような情報が入った。800の敵兵が左から旅団を包囲した。つまり、撤退の道が断たれた。敵軍はさらに、右からLiyuqianへ前進しようとしている。Зильбертは撤退に同意せざるを得なかつた。旅団は暗闇にまぎれてLiyuqianに撤退した。そこで警備隊を配置し、夜と翌日の半日を過した。

3月19日、旅団は再び錫坑に付近いた。敵軍がHengbeiを離れたことが明らかになった時、Зильбертは追撃を組織することを提案したけれども、同意は得られなかつた。3月20日朝、敵がHengbeiを立ち去ったという報告を入手した。旅団はその後を追って18時頃、水賽に到着し、そこでまた宿営した。結局、敵との接触は起らなかつた。Hengbeiで敵軍はすばらしい防衛陣地に立てこもっていた。恐らく、まさにここで我々の主力と会戦する予定だったのであろう。敵が呉鉄城旅団と対戦した際に見せる非積極的な姿勢を説明するには、このことだけで十分である。住民が確言したところでは、李易標將軍の兵力の一部は北方へ、残りは水口—梅県方面へ出発した。

Зильбертは夜中20日から21日にかけて、共同作戦のため旅団と共に河口へ移動してもらいたい、という私からの手紙を受取った。

水口に向かって我々は二つの道を進んだ：河の右岸を呉鉄城旅団が、左岸を黄埔軍校第1連隊が進んだ。雨

で洗い流された道を進まねばならなかった。水口で兵員約 600 名の敵の第 1 師団第 6 連隊に遭遇し、それを撃破し、夜までにその町を占拠した。呉鉄城旅団は 28 名の兵と 1 名の士官を捕虜にし、水口に宿営した。黄埔軍校第 1 連隊は河の左岸の村に陣取った。

3 月の後半から、南中国では熱帯性豪雨が始まり、まる 1 カ月かそれ以上続いた。

その時になって初めて、我々は中国兵の傘とつばの広いわら帽の良さを知った。その時初めて、山腹のテラス状になっている水田の構造がもつ実際的な意味を理解した。中国農民の勤勉な手によってつくられた人口灌漑路の複雑なシステムの必要性も、我々は理解するようになった。水は樋をつたって山から上部のテラスに流れ落ち、残りの水は穴を通してそれを回っている土手に集まり、下に流れて行って最後に平坦な所に達する。豪雨のシーズンが終ると、土手の穴は閉じられて水田に水が貯えられ、それが不要になると下に排出される。

我々は Зильберт と打合せをし、一方の道で時間が長くなりすぎないように、河の兩岸を平行して進むようにした。豪雨によって我々の計画は駄目になった。我々の部隊を分けていた河はとても浅く、急流でなければ所謂雌鶏が脚でそこを渡ることができるほどであった。ところが突然、我々の目前で水量が増し、狂暴になり、水位が非常に上り始めたので、我々は気が付くと実際には、お互いに切り離されてしまう可能性があった。そこで、我々は Зильберт に、早く左岸に渡るよう要請した：これは極めて好都合だったことが判明した。我々は間もなく、興寧へ進撃する命令を受取った。

雨期の始まる直前だったことは、私には運の良いことだった：敵の報告書を途中で奪った際、戦利品として馬を手に入れた。ポニーではなく、本物の馬であった。何応欽将軍がうれしそうに私に言った。《やっとあなたも馬を持つことができた》。すでに述べたように、何応欽はポニーを持っていた。その馬は小さかったけれども、気性がとても激しかった：気まぐれな性質で、いらないたり、土を掘ったり、後脚で立ったりした。扱いにくいので（顧問達は馬を持っていなかった）何応欽は今までそれを使っていなかった。将軍が喜んだのはこのことから解る。馬は我々が東征の 700 km を歩き通し、最後の 50 km 足らずになった時、私の手に入った。

馬には片目が無かった。右耳は恐らくサーベルで傷

つけられたらしく、折れた枝のように垂れ下がっていた。不幸にも、我々が進んで行ったのは深い狭谷の高い部分で、細いテープ状にぐるぐる回っている山の小道であった。馬の目が無い方に断崖があった。豪雨のため小道は滑り易くなっていた。そこで、私は初めて同様《自分の二本足》で東征を終える方を選んだ。

3 月 22 日、我々の連隊は興寧に到着した。

3 月 23 日、黄埔軍校第 2 連隊と第 1 旅団は敵が北方へ退却するのを防げるため Geshugan へ出撃し、さらに梅県へ進撃するという任務を課せられた。翌日、陳銘枢将軍と第 2 連隊長は敵が朝、Geshugan を通り北方へ向かったと知らせてきた。味方の第 2 連隊は夕方までようやくそこへたどり着いた。蒋介石の《敏腕さ》の結果、敵はまたもや、苦勞なしに興寧から江西へ逃れることができた。

呉鉄城旅団と第 7 旅団は 3 月 23 日、興寧に到着した。行軍は困難で、兵士達は疲労し、さらにまた、雨が始まった。それ故、全部隊に町での一日の休養を与えた。

3 月 22 日、第 2 師団が梅県を占領した。林虎将軍の部隊に対する作戦行動はこのようにして終った。第 1 の任務——敵の兵力を消滅させること——は達成されないままであった。陳炯明の傭兵のかかなりの部分は散を乱した状態ではあったけれども、我々から逃れた。

第 2 の任務——林虎の部隊の兵器を捕獲すること——は成功裏に実行された。戦利品は興寧だけで、大砲 7 門、弾丸 600 発、実包 2 百万発以上、ライフル約 2000 丁、機関銃 20 丁、種々の制服、その他の大量の軍備品であった。

しかし、本作戦全体の最大の成果は林虎将軍の根拠地となっていた広い地域を解放したことであった。

黄埔軍校連隊、第 1 旅団、呉鉄城旅団から成る軍団が林虎将軍の部隊との交戦を終えた時、第 2 師団は 3 月 16 日陥陥に到着、第 7 旅団は湯坑に達した。

捕獲した書類によると、この方面における敵陣営の状況は次の通りであった：陳炯明配下の軍隊は汕頭を撤退した後、船に乗り、Shanwei を占領しようとしたけれども失敗し、厦門に向け出帆した。そしてそこで、林虎将軍の勝利の知らせを待っていた。

洪兆麟将軍の敗北した軍(1, 2, 10 師団)は Sanheiba と大埔に退却した。洪将軍自身は親衛隊と 2 個独立連隊を引きつれ、平和(福建省)に去った。葉挙と Liying cheng の軍は大埔へ去り、その一部は東山(福建省)に去った。軍は大埔において、三河方面へ反撃に出る準

備をするよう命ぜられた。福建省から援助が来ることが軍に約束された。洪兆麟將軍は2個独立旅団を引きつれ、3月17日、誰も守っていない潮州市の北のはずれを占拠した。大埔に集結した部隊の方は命令を実行しなかった：反撃に移らなかっただけでなく、永定市（福建省）へ退却し始めた。

敵に潮州の防備を固めさせないために、3月17日、広州軍司令官許崇智は自己の司令部部隊、2個中隊を派遣し、敵軍を町から外に追い払った。同時に、將軍は第2師団に潮州に戻って来るよう命じ、一方、第7旅団には無理な前進をしないよう要請した。

この時、河婆から到着したB.K. Блюхерは許崇智に、上記の命令を破棄し、林虎將軍の主力を精力的に追撃し続けることを勧めた。許崇智は同意したけれども、時機を失していた。第2師団は洪兆麟將軍の軍隊に圧力を加えたけれども、主要な作戦——林虎將軍の軍隊を包囲する作戦——にはいかなる役割も果さなかった。彼の軍隊は潮州付近での敗戦の後、大埔を通して福建省に退去中であった。第7旅団は全く敵に遭遇せず、ぶらぶらと進軍した。

3月21日朝、汕頭の内港に、敵の上海艦隊所属の3隻の巡洋艦と6隻の小船舶が到着した。許崇智は自分の指揮下に、わずか警備隊1個中隊しか持っていない。巡洋艦の一隻に陳炯明自身が乗っている、という報告を斥候から聞いた時、異常に心配になった。陳炯明は汕頭を洪兆麟の軍が占拠していると思い、600名の部隊を引きつれてそこへ到着した。運の良かったことに、陳炯明は国民党の旗を見て、上陸することを決意しなかった《守備隊》が1個中隊であるなんて、どうして彼が知ろうか！

この時、輸送船《永初》が広州軍学校及び許崇智の親衛隊、合わせて約400名の兵士を乗せて、広州から汕頭へ到着した。その中に我々の顧問兵士Гмираがいた。その輸送船は危険を知らせるために送られた船と擦違いになり出会うことができず、全く平然と港に入ってきた。陳炯明の艦隊は輸送船目がけて大砲と小銃を発射し、それを捕獲し、厦門へ連れ去った。しかし、福建省の艦隊首脳部は丁度この時、広州側に付くことを目論んでいたので、10～12日後に、捕えられた。兵士や将校は、その中にはГмираもいたが、皆釈放された。

これを以て、第一次東征は基本的に終りを告げた。

後方に惠州城が残っていたけれども、Гмираはそれを占拠するには、黄埔軍校1個連隊で十分であると考え

ていた。この重要拠点を広西軍に占領させないようにする必要があった。《惠州作戦》が準備されている最中に、楊坤如司令官を長とする惠州の守備隊（兵約4千名）は兵士、将校共全軍が雲南軍に編入されることを条件に、すでに雲南軍に投降したとの情報を入手した。

第1次東征の成果を総括した際、軍団の指揮官達は意識的に自分達の戦利品の数量を、少なく見積もった：誰か他の者と分けねばならないのではないかと恐れた：概算による捕獲品は次の通りであった。種々のライフル——1万2千～1万3千丁、機関銃110丁、旧式砲——30門、新式山砲—6門、種々の口径の弾薬——8百万発、砲弾——1500発、野戦用無線機3台、Shanweiの兵器庫。

黄埔軍校の分として手に入ったのは戦利品全体のせいぜい3分の1であった。最も多く手に入れたのは第2師団と第7旅団であった。

第一次東征は見事に成し遂げられた。我々は極めて限られた兵力で、数において勝る敵を撃破することができた。

我々の勝利を決定的なものにしたのは次の事柄であった。

第1は中国国民党と共産党の緊密な協力である。これによって、民族の解放を求めて闘い、大衆の支持と保護を得た孫文の革命政府の立場は著しく強化された。第2は中国の新しい民族—革命軍の誕生である。そしてその基礎を築いたのは黄埔軍校第1、第2連隊であった。まさにこの部隊が決定的な役割を果し、第一次東征を完全な勝利に導いたのであった。

軍は民主化され、その中に政治工作員制度が生まれた。軍隊と民衆の間に友情と相互援助の関係が生まれた。

東征が終了した後、我々は船に乗って興寧から汕頭へ下り、そこから蒸気船で広州へ向かった。

ここで、医者は私に厳格な食餌療法を指示し、Henam島にある病院に私を送った。

《同盟者の裏切り》

陰謀

雲南軍閥と広西軍閥の《同盟軍》はほとんど公然と、広州で反乱の準備をしていた。

第一次東征の後、広州の状況は表面的には全く安定していた。中国共産党及び国民党は労働組合第2回全

中国大会と広東省農民協会第1回大会の開催の準備をしていた。しかし、孫文の死後、国民党右派分子はすぐに頭を持ち上げた。實際上、彼らのリーダーは広東政府の指導者の一人である総理代理、胡漢民であった。信頼できる政府軍が東方に出撃したので、事実上、政府は雲南と広西の軍閥の《同盟》軍に囲まれた状態になっていた。国民党右派はその中に、孫文の忠実な同志との闘いの支えを見出した。

すでに我々が見てきたように、《同盟者》は第一次東征中に陳炯明軍と対決した際、革命軍グループを支援するための行動を全くとらなかった。彼らの陰謀はずっと以前から疑われていた。《同盟者達》は陳炯明と共謀し、裏切って背中を刺す危険を常に持っていた。林虎將軍の参謀を捕虜にした際、楊希閔が許崇智將軍の軍団に対して、林虎と共同作戦をとることに同意していたことを裏づける書類を入手した。当然、楊希閔はこれは茫石生將軍側が自分の名前を悪用したものだと言明し、自分自身はこの裏切りについてはまるで何も知らないかのようであった。

広西軍団総司令官劉震寰は惠州包囲攻撃を指揮する代りに、何度も、しかも長期にわたって香港や広西に出かけた。後で明らかになるように、彼は雲南の將軍唐繼堯と、広州政府に対する共同進攻について、交渉を行っていた。彼が旅行に出かける目的に関して政府が質問すると、いつも、彼は曖昧な返事をした：それは総司令官楊希閔の承諾と信頼に基いて行われた。

例によって香港へ旅行した後、劉震寰將軍は不審な軍隊の再編成を計画した。彼は選り抜きの兵士から成る特別の教育一基幹連隊を自分の司令部に創設し、広西軍付属軍官学校の生徒数を500名にまで拡大した。一方、自分の宿舍の傍に歩哨を置いた。彼らは街の交通を止めて通行人の通行証を点検した。このような異常な措置を、何故行ったかという政府の質問に対して、劉震寰將軍は次のように言明した。自分は茫石生將軍の軍隊が攻撃してくるのを恐れている。それ以外にも、自分の所に広西から、貴賓がしばしばやって来る。彼らの生命と安全性に対して自分は個人的な責任を負っている。

雲南及び広西の軍閥達をめぐる雲の厚い覆いは次第に消えた。唐繼堯、劉震寰、楊希閔將軍達が香港から来た英国の帝国主義者、広州の買弁の明らかな教唆のもとに、秘密の協定を結んだことを、4月の初め政府は知った。その主要な目的は広州に於いて変革を遂行することであった。

この協定の基本となるのは次の点である。北方政府と闘うため、中国の南部諸省の連合政府を広州に樹立すること；政府は国民党右派の政治綱領を実現すること；汕頭にいる許崇智將軍のもとに、協定締結のため唐繼堯から代表が向かうこと；《ボルシェヴィキの軍隊》である黄埔軍校の軍隊を即時、武装解除させること；偽装のため、陰謀の一味は自分達が革命政府の打倒を課題としているのではなく、逆に政府と条約を結ぶつもりである、という声明を出すこと。

4月10日、陰謀の指導者達は政府に対して、武器庫の共同管理の確立を要求した。

蒋介石將軍は当時、黄埔軍校を離れず、広州には姿を現わさなかった。許崇智將軍はB.K. Блюхерの忠告を無視し、解放された地区を固める代りに、新たな出撃——福建省へ——の準備に取り組んでいた。

4月23日、范石生將軍が南寧付近で唐繼堯に敗北を喫し退却しつつあるという知らせを得て、広州の反動派達は目に見えて活気づいた。

劉震寰將軍は香港から唐繼堯の代表者達を運び入れ、彼の司令部は熱に浮かされた会議の場となった。この会議に、楊希閔の参謀長Zhu ze-deや広東大学の学長である国民党右派の有名な活動家鄒魯も参加した。その会議で反革命軍の統一条件が作成されたことを政府は知った。

政府の特別会議において、4月24日、汕頭に廖仲愷、蒋介石、B.K. Блюхерを送ることが決定された。その目的は陰謀の一味に対してとる行動に関して、許崇智將軍と協定を結ぶことであった。

4月27日、汕頭への途中船上で、この使節団は反乱鎮圧の唯一の方法は武装闘争であると決定した。この決定はB.K. Блюхерの努力の結果であった。蒋介石は状況を絶望的だと判断した。唐繼堯が広州を占拠した後は楊希閔や劉震寰と折り合いがつかなくなり、彼らが殴り合いをする時にこそ、軍事行動を起こす可能性が出てくると考え、彼は黄埔軍校を汕頭へ移すことを提案した。言いかえると、蒋介石は戦わずして広州を引き渡すことを提案した。B.K. Блюхерは、広州を一時的にせよ失うことは広東のみならず全中国の革命運動に重い、とりかえしのつかない損失を与えることになること、そして広州を守るために戦わねばならず、またそのための兵力は十分あることを立証した。B.K. Блюхерの意見を支持したのは廖仲愷であった。そして蒋介石は同意せざるを得なかった。

4月28日、政府の代表者達は汕頭に到着した。許崇

智將軍は福建省への出撃の準備の真最中であつた。許崇智はなかなか、使節団が述べた計画に同意しなかつたけれども、最終的には、福建省出撃は時機を得ていないことを認めた。先ず第一に、全兵力を結集し、反乱者達を撃滅するのが不可欠であることは明らかであつた。反乱者に対する攻撃が時期尚早で失敗に終らないために、雲南グループ、唐繼堯と闘おうというスローガンの下に、政府軍の集結を実施することが決定された。反乱軍の数は約2万名であつた。政府側は湖南軍及び朱培徳軍団を含めて2万5千名であつた。東方グループの広州出撃は5月5日、蒋介石総指揮の下に始められることが決定された。

丁度その日、陳銘樞將軍が到着した。彼は広西省の状況を詳細に説明し、楊希閔と劉震寰將軍が唐繼堯と謀議をしているという情報を確認した。

5月1日、広州は范石生將軍の軍隊が南寧付近で壊滅したことを否定する、彼からの電報を受け取った。

5月中旬までは、雲南軍も広西軍も表面上は政府と友好的な関係を維持し、反乱の準備を隠そうとし、自分達は心からの忠誠心を持っている、と政府に断言し続けた。

政府自身の中にも動揺が起つていた：右派分子は明らかに、反乱者の力を過大評価していた。特に范石生の電報を入手した後はそうであつた。そして妥協することを強く主張した。

最終的に左派が勝利をおさめた：軍事的手段で雲南—広西の難問を一気に片付け、広東省から軍閥を完全に掃蕩する、というスローガンを出すことが決定された。

5月2日、広州に於いて、労働組合及び農民の大会が盛大に挙行された。

5月5日、蒋介石將軍は汕頭から電報で、許崇智が進撃を意図的に抑えており、4月28日に採択された決議を実行していないと知らせてきた。

廖仲愷は広西軍に対し出撃するよう、譚延闓と朱培徳を説得することはできたが、雲南軍と戦うことをこの両將軍は恐れていた。

劉震寰將軍は広西軍が広西へ帰ることを許してくれるよう、胡漢民に依頼した。

その間に、楊希閔將軍は政府が范石生軍に援助を与えるのに手間どっている、と政府を一方的に非難した。さらにまた、彼は広東省の西部に配置されている戦闘部隊を、范石生のところへ派遣することを要求した。楊希閔は税金の上がりを横領し、自分の警備隊を兵器庫

に駐屯させ、広州の重要拠点全てを占拠した。政府は雲南及び広西の將軍達の誓いをもはや信ずることなく、5月9日、反動派軍閥に対して闘いを始めることに決めた。

5月10日、В.К. Блюхерは反乱者達と闘うプランを政府に提案した。その計画は完全な賛同を得て、5月13日、汕頭の司令部の会議で詳細に検討された。出席したのは廖仲愷、Блюхер、朱培徳、国民党政治委員長汪精衛、許崇智、蒋介石であつた。

情況の分析と最終的に承認されたБлюхерの計画の基本的な条項は以下のように要約される。

范石生の軍隊(約6千名)は南寧の戦いで失敗した後、広西の將軍で、広州政府の味方である李宗仁、沈鴻英(4~5千名)の軍隊と連合するため、東方へ退却した。恐らく、唐繼堯將軍の広州進撃の可能性はごく近い将来にはあり得ないであろう。洪兆麟は自分の軍隊(4~5千名)を連れて福建へ、一方、林虎(6~7千名)は江西へ退却した。彼らの側からすると、積極的な行動を期待すべきではなかつた。同じことが陳炯明の同盟者である鄧本殷將軍に対してもあてはまつた。彼の軍隊(8千名)は広東省の南西と西部を占拠していた。彼の軍隊は第一次東征の時にも、何ら積極的な行動をとらなかつた。

従つて、反乱者達が当てにできたのは自分の兵力だけであり、それは5月後半、再編成された後、次のように配置されていた。石竜地区の広西軍は広州—九竜鐵路から北の広州—韶關鐵路へ移動した。その基本となる兵力は第1、第2、第3師団で、全兵力4~5千名、Kaomang — Singkai 地区に配置された広西軍は全部で約7千名の兵士がいたけれども、その内實際上、戦闘に投入できるのはせいぜい5千名であつた。

雲南軍第1軍団第1、第2師団(5千名)は広州にいた；第2軍団第5、第6師団(5千名)は広州の南東にいた；楊希閔の独立連隊と軍官学校(800名)は石灘——増城地区にいた。第3軍団第7、第3師団(4千名)は惠州——博羅——河源地区に在り、別に淡水——平山地区に1個連隊(小銃600丁と機關銃6丁)を持っていた。雲南軍は全部で約2万6千~2万7千名、機關銃120丁、大砲20門であつた。実際に戦闘に出ることができるのは兵士2万名であつた。

かくて、反乱軍の数は3万3千~3万4千で、そのうち2万5千までを戦闘に投入することが可能であつた。彼らの管理下にあつたのは鉄道、良好な通信、陳炯明に対する防備をするために準備された広州の強化

された地区であった。

政府軍の配置は次の通りであった。

広東省北部に譚延闓の湖南軍 8100 名がいた。それに独立した形で加わっていたのが程潜將軍の部隊——1600 名と湖北軍——500 名であった。同じ所に朱培德將軍の軍団——兵員約 3400 名がいた。

広東省の東部に広州軍の主力——1 万 8 千名が配置されていた。

西部に梁鴻楷將軍の第 1 軍団——8 千名と李濟深將軍の第 1 師団——3 千名がいた。

南部には約 5 千名が集結していた：それは李福林將軍の第 3 軍団と他の大隊を伴った黄埔軍校であった。

かくて、政府は 47500 名の軍隊を所有していた。反乱者を撃滅するために立てた B.K. Блюхер の計画に基いて、次のグループが形成された。

北方グループ。司令官譚延闓、兵員 1 万名（湖南軍から 7 千名、朱培德軍団から 2500 名）。湖南軍は 5 月 30～31 日までに、沙口——河頭——韻関地区に集結することになっていた；朱培德軍団は Xihe 地区にあった。このグループの上記の軍隊は北からの進路を護衛することを任務とした。

東方グループ。司令官蒋介石。兵員 1 万 2 千～1 万 3 千名。このグループに属しているのは黄埔軍校第 1、第 2 連隊、許済將軍の第 4 師団（旧第 7 旅団）、呉鉄城旅団、Hetiying 將軍の第 6 旅団、陳銘樞將軍の第 1 旅団であった。それらに対して、5 月 21 日、汕頭、梅県、興寧地区から出発し、6 月 2 日までに平山と白芒花に集結するという指令が出された。東部に配置されている残りの部隊（兵員約 8 千）は許崇智將軍の指揮の下、洪兆麟、林虎將軍の軍隊の進入からこの地区を守る任務を持って当地に残った。

西方グループ。第 12、13 及び 19 旅団を含む梁鴻楷將軍の第 1 軍団 6,500 名は 5 月 29 日までに肇慶地区に集結。

南方グループは兵員 6 千名で 3 個の独立サブグループに分かれ、司令部直属であった。第 3 軍団司令官李福林 (2,500 名) を長とする第 1 サブグループは 5 月 27～28 日までに Henam 島に集結した。第 2 サブグループは呉鉄城（兵員千名）の指揮の下にあり、広州に留まっていた。反乱が始まると、それは Henam 島へ行く指令を受けていた。第 3 サブグループは黄埔軍校生徒と若干の少部隊（合計約 1,500 名足らず）から成り、虎門島及び黄埔島を防備することを第一の任務としていた。

かくて、政府の管理下にある 4 万 5 千～4 万 7 千の兵員のうち、3 万名が反乱者撃滅のために予定された。

Блюхер の計画に従って、海軍には次の任務が与えられた。

1. 政府を支持する全海軍力の集結。
2. 虎門島と黄埔島へ渡河して来るのを防ぐこと。
3. 市を封鎖して海及び東江からの進入を防ぐこと。
4. 政府軍の東江渡河及び予想される上陸作戦を確保すること。
5. 交通の確保。
6. 政府軍間の通信の実行。

作戦が始まるまで、唯一の信頼できる軍は広州軍海軍であると思われた。5 月 20 日までは塩務処の武装船団も政府に対する忠実を宣言した。

その間、茫石生將軍所属の小艦隊の士官達は秘密裏に反乱者達と交渉を行っていた。

広州にいる軍隊に対する進撃のための初期編成を 6 月 6～7 日に行うよう、指令が出された。強襲は 6 月 11～12 日に予定された。政府軍には少なからぬ弱点があった：大きく分散していること、構成が単一でないこと、軍隊の政治教育水準に大きな差があること。

黄埔軍校の生徒達は自覚的な革命の兵士であったが、一方、例えば第 1 広州軍団の兵員は国民党右派の影響の下にあった。廖仲愷は次のような手段をとってはじめて、この軍団の司令官が政府側について出撃するように彼を説得することができた。即ち、反乱者に対し勝利をおさめた後、彼に住民から税金を徴収する全ての権利を与えると約束した。

蒋介石の東方グループに属する広州軍の諸部隊もまた、政治的態度において第 1 軍団とは少し異なっていた。

より信頼できるように思えたのは湖南軍と譚延闓と並んで当時、国民党左派に属していた朱培德將軍の軍団であった。もし反乱者達が権力を握ったならば、これら將軍の軍隊は直ちに武装解除されるか、或いは最良の場合で広東省から追放されるであろう。しかし、彼らには行く場所はどこにもなかった。

B.K. Блюхер の計画は政府軍が広州の中心に向かう際、政府軍のあるグループに大きな打撃を集中すると思われる敵の作戦のバリエーションを、いくつか想定したものだった。その計画では、政府軍が広州から引き揚げることや、必要な場合には政府の貴重品を黄埔島へ疎開させることが予め考慮されていた。

通信が当てにならなかったので、政府軍の各グループはВ.К. Блюхерの計画に従って決められた作戦行動の順序を、厳格に守るよう命ぜられた。

5月13日の会議において、Hanam 島に胡漢民指揮下の司令部を作ることが決定された。それには、参謀と軍事顧問団長 Блюхер が加わることになっている作戦会議が付属していた。この決定によると、全ての作戦問題が彼に委ねられていた。他の顧問達は軍と共にいた。

会議は《軍閥唐繼堯に向って進撃せよ》というスローガンの下に、反乱者に対して攻撃を開始する決定を下した。その後、《軍閥達——住民の略奪者——を打倒せよ》、《国家の民族——革命的解放事業の裏切者を打倒

せよ》というスローガンを提唱することに決定した。

5月14日、廖仲愷と汪精衛は広州へ戻って来た。

5月15日、Блюхер が汕頭を去る前、蒋介石はこの軍事顧問団長に、広州軍の第4師団と第6旅団を編成からはずし、自分の東方グループを6~7千名に削減してくれるよう要請した。蒋介石は自分の要請の本当の狙いは言わなかったけれども、広州軍の大きな部分を除くことによって、許崇智將軍の影響力を減らすことができるかと期待したのは明らかであった。В.К. Блюхер は蒋介石の要請に応じなかった。反乱者撃滅が主要な任務となっている東方グループを弱めてはならなかった。